

新緑の中行われた全日本大会。男女ともにベテラン選手が接戦をモノにした。

2012年5月4日 広島県庄原市  
全日本大会

#### 男子選手権結果

1	松澤俊行	1:26:39	静岡 OLC
2	小泉成行	1:26:49	O-Support
3	小林遼	1:27:20	渋谷で走る会
4	紺野俊介	1:30:06	横浜 OL クラブ
5	鹿島田浩二	1:30:56	渋谷で走る会
6	結城克哉	1:32:09	東大 OLC

#### 女子選手権結果

1	田島利佳	1:16:27	みちの会
2	朴峠周子	1:16:30	ときわ走林会
3	渡辺円香	1:19:47	ES 関東 C
4	関谷麻里絵	1:20:30	朱雀 OK
5	皆川美紀子	1:20:55	みちの会
6	加納尚子	1:21:58	朱雀 OK



優勝した松澤俊行と田島利佳



松澤俊行、帝釈峡（広島県北部）を走る

ゴール前のコントロールで、泥に足を取られ、靴が脱げた。彼はそのまま裸足でゴールに向かった。「だって、靴を取ろうとしている時間で負けたら悔しいじゃないですか」。彼の気迫がチャンピオンの称号を呼び寄せた

### 頂点への思い

今回チャンピオンとなった松澤のはじめての優勝は2000年に彼のオリエンテーリングの故郷である仙台でのレースだった。前年には、何年かごしの思いを遂げて世界選手権に出場、(当時あった)3種目全部に出場している。彼はその時はじめて真剣に「チャンピオンになりたい」と思ったのではないだろうか。その後2003年に山口で二度目のチャンピオンに返り咲いた。この間、松澤は日本のトップに君臨してきたが、9年の長きにわたり、チャンピオンの座に縁がなかった。しかし、昨年の全日本で3位と、久しぶりに順位を上げてつかんだ手応えが、チャンピオンへの思いをかき立てたのだらう。

「一年間優勝を目指して取り組んできました。しかし、2月3月は体調を崩しがちで、沈滞ムードの時期もありました。4月にナショナルチーム合宿やクラブ内練習会が続き、その内容も基礎の見直しや自己把握を進める上で最適なものだったため、自信を回復できるように思えました。特に、クイック0やコントロールピッキング、クロスカントリーといったメニューが役立ちました。」とレースへの軌跡を語る。

### 取っても食えない、しかし・・・

文系での博士号の取得が今ほど一般的なでなかった20年頃前、「博士号とかけて、足の裏についた米粒と解く」という謎かけがあった。ここは「取らないと気になるが、取っても食えない。」ある分野にエネルギーを注いだものとして、自分の仕事をまとめておきたい。「取らないと気になる」というのは称号そのものよりもそういう意味合いが強いのだろう。マイナースポーツであるオリエンテーリングでは、全日本のタイトルをとったからといって食い扶持が保証されるわけではない。その意味では博士号と同じ「とっても食えない」。では、「取らないと気になる」方はどうだろうか？

1995年の矢板での全日本、僕の15連覇が途切れた。僕がはじめてチャンピオンになった時と同じように、その日は寒く雪の積もる日だった。調子は悪くなかった。自分では切れに欠ける印象があった中盤までのタイムを見ても、十分優勝できるタイムだった。優勝した鹿島田にも、ぜひ勝ちたい理由があった。前年のスイスの世界学生選手権を目指した彼は、しかし直前のトレーニングキャンプで膝を数針縫う大けがをした。レースは出られないどころかそのシーズンの復活さえ危ぶまれるケガだった。しかし、リハビリをアドバイスしたスイスチームのドクターの助言が良かった。それ以上にケガは鹿島田に、オリエンテーリングができての喜びを再認識させてくれた。

レース運びを見ると、2位の小泉が多くの1位ラップをたたき出しているのに対して、松澤の1位ラップは多くない。老獺とも言えるオリエンテーリングだ。「30代後半になってからは、5年前の北海道で鹿島田選手が見せた『ベストラップなしでの優勝』を一つの理想像としていました。老獺と言われるとその時の鹿島田選手に近付けたのかも…と思え、嬉しく、照れ臭いようでもあります。」詳しく見ると、1番2番のラップは6位、7位と速くなく、9番でも1分以上のミスをしている。普通ならばとしないタイムでずるずると走り続けそうなところだが、淡々としながらも悪くないタイムでその後をまとめている。「どんな勝負でも形勢は

刻一刻と揺れ動くものなので、それに合わせて感情まで揺れ動くようではいけません。『淡々と』と見えるラップを重ねているのは、確かに熟練と言えるような気がします。でも、ベストラップが3レグがあるので、まだまだ若々しい、もっともっと老獪になれそうだな、と思っておきます。』

## それぞれの戦略・思い

若いころとは違う彼の戦略なのかもしれない。「ある特定のレグで好感触だった、というよりは全体のレース運びが良かった、と感じています。全日本では、経験上ミスによるロスタイムそのものより、ミス後の動揺や悲観によって、リズムを崩したりペースが落ちたりすることが勝負に影響すると痛感していました。その経験に基づき、手堅いルートを積極的なペースで走ること、ミスの後に体制を立て直してから攻撃を再開することを強く意識しました。前半で舗装道路に出る部分と、後半で舗装道路を離れる部分でいずれも凡ミスをしています。反省は残りますが、『こういう場所でミスする分、他ではミスしないはず。』

10秒差という悔しいタイムで2位となった小泉は、実は7ラップをたたき出し、巡航スピードも97.2と松澤を3ポイントも上回っている。その分なんでもないレグ11で大きなミスをしている。彼は何を考え、レースをしていたのだろうか。

プロとして活動する彼にとって、全日本チャンピオンを名乗れるかどうかはこの1年の仕事にも影響がある。「ご飯のためにがんばろう、という気持ちは持っていた反面、直前の選抜合宿でも体力、技術面で十分可能性を感じ、昨年の課題だったメンタル面の改善にも取り組み、よい状況で迎えられた。

体調もよく、7ラップもとりながら、とても頑張ったという印象はなかったのだそう。冬のトレーニングがうまくいっていたのだろうと、彼自身分析している。

一方で、技術的にはまだ十分ブラッシュアップできておらず、今は手続きを少しゆっくりと丁寧にやっているというが、それが12番でのミスの遠因になっていたのかもしれない。このレグは簡単でM21Aでも共通レグで、つなぎのレグにも見える。だが、それが落とし穴だった。加えて、地図の歪みのせいか、やや地図から見る印象ともこの場所はことなっている。「ここだけはアタックポイントの設定をあいまいにしまった。」と小泉は振り返る。ロスタイムは大きく、さすがに焦

ったということだが、他の選手も同じミスをしているはずと思い込み、気持ちを崩さずに終盤を走れたこと(タイムも終盤のほうがよい)が今回のレースの一番の収穫だという。「一瞬の油断で優勝を逃してしまったわけですが、それがスポーツ・オリエンテーリングの醍醐味。次のレースはうまくやるぞ、と楽しみにしています。」と、小泉はポジティブに捉えている。

両者の明暗の背後にははっきりした違いを見いだすのは難しい。結果が別ただけで、両者ともそれぞれのチャンピオンへの思いを持ってレースに臨んだことは確かだろう。

3度目の優勝についても、「本当に、嬉しい限りです。前回の優勝の後、6年間は4位が5回、6位が1回と、入賞は続いても優勝争いからは遠ざかっていましたから、感慨もひとしおです。」と語る。

最後に彼は若い選手に対して、次のような言葉を語ってくれた。

「私の好きな考え方に、『若い時はベテランを目標に、ベテランになったら若い選手を目標に』というものがあります。若手たちが私を目標にしているかどうかは分かりませんが、私は若手の強み、例えば思い切りの良さなどを見習っていきたいと思います。ですから、若い選手に一言言うとしたら『若さを前面に押し出した走り、ベテランに刺激を』となるでしょうか。」



男子選手権クラス上位6名

左から2位小泉成行、選手権者松澤俊行、3位小林遼、4位紺野俊介、5位鹿島田浩二、6位結城克哉

## 田島利佳、チャンピオンへの思い

チャンピオンへの思いという点で、田島利佳を上回る選手はいない。小学校の時にオリエンテーリングをはじめ、短大2年間にしてインカレ2位の結果を残し、21歳で全日本のエリートに初出場してから今年でちょうど20年。その間3位5回、2位が2回という成績は立派だ。その反面「シルバーコレクター」とあだ名もされる。「強化選手をやっていた頃は、勝ちたくてもどうして

も勝てなかった」が、現在では、オリエンテーリング大会に参加するのは年に5回あるかどうか。その中で勝てたことには複雑な思いもあるに違いない。

キャリアを十分積んだ選手なら、誰でも加齢とともにモチベーションの問題に突き当たる。田島も例外ではない。しかしチームメートの皆川に誘われたことや、久しぶりに学生のコーチとなり、彼女が何もできていないことに愕然としながらも、それに対してあれこれ指導することが、田島自身のモチベーションになったに違いない。

一方で、決して体調はよくない。2週間前に山と一緒に走った時は、登りであまりスピードが上がらないのに愕然とした。その不調感は、レース数日前まで続き、キャンセルしようか悩んでいたほどだ。しかし、参加するのなら優勝を狙い、きっちりレースをする、そう思い込めるところに田島の強さの基盤があるのだろう。

体感スピードは5-10%落ちている。その分技術面でのミスはでにくい。そして、ミスをしてはいけないのだ。スタートして距離感覚、地形の描き方などを確認すると同時に、練習不足で走りながらマップコンタクトがほぼ不可能なため、プランをきちんと立ててメモリーに近い形で進んだ。逆に次に何が見えてくるはずか、また何を指すかを強く意識できたのだろう。リズムよくオリエンテーリングはできなかったが、確実に進むことができたという。

ラップを見ても、1位ラップは3レグあるものの、前半は3位から10位のラップを推移しているし、5番でもまだ加納、関谷、朴峠の後塵を拝している。会心のレースで優勝!からは程遠いが、現状を冷静に踏まえた上で、自分をコントロールして、遅いスピードにイライラせず我慢して集中しやるべきことを徹していた結果が初優勝という大殊勲につながったのだ。

彼女も現在40歳、超ベテランと言っても差し支えない年代に達した。若い選手に対して「夢を持つこと、オリエンテーリングを好きになること、そして続けること」という言葉にも、一層の重みが加わった。





朴峠周子。優勝した田島から遅れること僅か3秒差で女子2位となった。

## 朴峠、環境変化への挑戦

就職すると誰もが新しい境遇に適応しなければならない。とりわけアスリートにとって、歓迎会が続く春は調整がしにくい時期だ。その中で、社会人一年目の朴峠は、これまでとは異質の多忙さに身も心も大きく振れながらも、現状を受け止め、優先順位を考えた。彼女にとって、今回のレースはチャンピオンを目指すものというよりも、再スタートの足がかりとして位置づけた。目標も、「ここ1年間のオリエンテーリングへのコミットやトレーニング状況を踏まえ、6位入賞」という現実的な設定だ。

レース内容もちろん満足できるものではなかった。序盤では、情報処理・判断・実行のプロセスを意識的に行い、今一度レースに入り込んでいこうと考え、また、レース中は、意図をもって動くこと、集中力の強弱をつけることに留意した。集中の波間で小さくないミスもしたが、その後に活かせる具体的な対策を考えることに切り替え、頭の隅に置く。心理的にコントロールすることで、終始一貫して自分を見失わないことができたようだ。結果として明

暗は分かれたが、朴峠もまた自分の状況を冷静に見つめることで、その中でベストパフォーマンスができたと言えるだろう。

トップ選手の多くに全日本へのチャンスはある。だが、実際にそのチャンスを者にできる選手の数に限られている。調整不足や練習不足はもちろん、タイトルへの思いが邪魔をすることも。こうした試練があるからこそ、そしてその試練を乗り越えようとする努力があるからこそチャンピオンには取ったはじめて味わる価値がある。その意味では、チャンピオンもまた「取らないと気になる」ものと言えるだろう。

今年の出場予定はないが、朴峠は再び、世界選手権の舞台で戦いたいと考えている。そのためには、周囲への働き掛けることが、競技に向き合う心身への糧となるはず。史上最小の3秒という差でタイトルを逃した朴峠はもちろん、3位の関谷、4位の加納、いずれも未冠である。彼女らに取ってチャンピオンが「取っていないことが真剣に気になるもの」になること、そこから新たな物語が生まれることを期待したい。



女子選手権クラス上位6名  
後列左から2位朴峠周子、選手権者田島利佳、3位渡辺円香、4位関谷麻里絵、5位皆川美紀子、6位加納尚子

## ◆田島利佳:初優勝への軌跡

- 2012年(2011年度)全日本優勝 40歳
- 2011年(2010年度)全日本3位
- 2010年(2009年度)全日本7位
- 2009年(2008年度)全日本3位
- 2008年(2007年度)全日本6位
- 2006年(2005年度)全日本3位
- 2005年(2004年度)全日本3位 WOC 出場
- 2004年(2003年度)全日本2位 WOC 出場
- 2003年(2002年度)全日本4位 WOC 出場
- 2002年(2001年度)全日本2位 30歳
- 2001年(2000年度)全日本13位 WOC 出場
- 1999年(1998年度)全日本4位 WOC 出場
- 1996年(1995年度)全日本3位
- 1995年(1994年度)全日本10位 WOC 出場
- 1993年(1992年度)全日本初出場 21歳

## ◆松澤俊行 3度目優勝への軌跡

- 2012年(2011年度)全日本優勝
- 2000年度、2003年度に次いで3度目)
- 世界選手権(1999、2001、2004~2011 計10度出場、2012年で11度目)
- なお男子全日本選手権で3勝以上を挙げたのは、遠藤務、村越真、鹿島田浩二について4人目である。



松澤俊行と田島利佳。「一等賞！」

(村越 真)